

第2節 傷は癒されるか—村上春樹『アンダーグラウンド』の授業

1 「癒し」の問題をめぐって

本節においては、現代社会の一つの社会問題に焦点を当てて、学習者の側から様々なことばの活動を通してその問題と真摯に向き合うことを考えてみたい。そして「癒し」という観点を加えることによって、本研究で追究する「サブカルチャー教材」の範疇に加えて、学習者の興味・関心喚起を目指すことにする。

ことばにおける「癒し」の機能に着目しつつ、それを国語教育の課題として考え続けてきた。「癒し」ということばは、宗教や精神医学の分野を遥かに超えて、時代の一つのキーワードになっている。いま世の中にはヒーリング・グッズやヒーリング・アート、ヒーリング・ミュージックなどが次々と現れ、「癒し」「セラピー」に関するセミナーや文献の数も多くなっている。現代社会は多くの心身のストレスに苛まれる時代だからこそ、その癒しが求められるのだろうか。上田紀行の『癒しの時代をひらく』（法蔵館、1997. 3）では、「二一世紀を拓くキーワードのひとつは、間違いなく『癒し』だと思う」と断言されている。

子どもたちは常に、社会の現実を過敏に受け止めている。現代社会に潜む構造的なストレスの影響を直接受けている子どもたちこそ、いままさに「癒し」を必要としているのではあるまいか。「癒し」は教育の場でもっと追求されてよい。特に「ことばの癒し」に関して、国語教育は重要な役割を担うはずである。わたくしの問題意識は、そこから出発した。21世紀を迎えて、大きな教育制度の見直しが進んでいる。その一方で多くの教育問題が次々と浮上し、子どもたちの周囲には、そして学校という現場には、緊急に対応が迫られる深刻な課題が溢れている。たとえば不登校やひきこもり、高校中退などが年々増加傾向にあるという事実、さらにいじめの問題も根強く残って、本質的な解決策を見出すことが困難な状況にある。

子どもたちを誘惑するものも多くなった。彼らはあまりにも真面目で堅くかつ暗い学校の文化よりも、軽くて面白く明るい学校外の文化に魅力を感じるようになってしまった。茶髪、ピアス、ルーズソックスなどのファッション、携帯電話の所持、「プリクラ」で移した写真の交換、SNS（ソーシャル・ネットワークキング・サービス）、プロフ等々の高校生の流行は、彼らの「文化」を物語る。ジャーナリズムや音楽、テレビ等々各種メディアの影響も認められる。苦勞して尊いものを得るという価値観は崩壊し、彼らは「おいしい」という流行語さながらの生活を求め続ける。学校の持つ保守的な文化傾向は、子どもたちから敬遠される一方である。授業中の学習者の私語、居眠りが増えているという現実、学校に対する彼らの意識と無縁ではない。この点に関して、社会学者の宮台真司は次のように説明した。

私が最も重視したいのは、未来や社会のためというより「今ここ」を楽しく生きようとする若い人たちの魂が、小学校・中学校・高校・大学を含めて学校的空間のうちに安らうことを、やめてしまったことだ。せいぜい学校は、学校でも家でも地域でもない「第四空間」の存在を前提にした「社交の場」でありうるだけである。¹

授業や課外活動を通して子どもたちに生きがいを与えるはずの学校の機能は、いまや崩壊してしまったのだろうか。彼らの生きる場所はもはや学校ではなく、宮台氏の言う「第四空間」へと移ってしまったのだろうか。とすれば、今後学校は「癒し」の場所として再生することができるのだろうか。わたくしの問題意識はそこから出発する。

抽象的な教育論議をいくら重ねても、問題は解決しない。国語教育を担当する立場としてとりあえずいまできることは、担当する授業を通して「癒し」につながる要素を積み重ねることである。本節ではわたくしの前任校²における1997年度の高等学校3年生を対象とした「現代文」の実践に即して、具体的な論述を試みる。1997年度の主な担当は、高校3年の「現代文」文系3単位4クラスおよび理系2単位1クラスであった。以下に「現代文」の授業において前期に扱った「癒し」をテーマとした単元の概要を紹介しつつ、「癒し」としての国語教育の可能性を追求することにした。

2 村上春樹『アンダーグラウンド』の教材化

前期の授業では主として「現代」に関わる様々な研究テーマを掲げて、自主教材を中心とした授業を展開してきたが、最後に文理両系に共通する教材として、村上春樹の『アンダーグラウンド』（講談社、1997. 3）を用いた授業を展開することにした。周知のように第15期中央教育審議会の第1次答申で「生きる力」を培うことの重要性が指摘されてから、新しい教育の課題としてこの「生きる力」が一つのキーワードとなった。様々な観点から「生きる力」の育成が追求されているわけだが、府川源一郎は国語教育における文学の学習と「生きる力」との関連を考察し、文学作品の「問いかける力」に着目して、それを「読み手の中に転化させ、自分自身の問いを生み出すための触媒とすること」に「文学」が「生きる力」に関与する契機を見出している³。府川が具体例として掲げた作品は、村上龍の『ラブ&ポップス』と村上春樹の『アンダーグラウンド』である。このうち『アンダーグラウンド』に関しては、次のような指摘がなされている。

作者が人から話を聞くこと、ひたすら耳を傾けること、によって成し遂げた成果である。一つ一つの話が重なり合い、またずれることによって、複合的な現実が顔を見せてくれる。ここにも「文学」が現代に関わり、問いかけようとする一つの姿がある。

わたくしが『アンダーグラウンド』の教材化を考えた理由は、一つに府川が指摘した作品の「問いかける力」を教室に持ち込みたかったという点にある。現代を生きる一人ひとりの高校生に、「生きる」ことについての真摯な問いかけをしてみたい。さらに、彼ら自身に村上春樹と同じ立場に立たせて、実際に「聞き書き」をさせることで学習をまとめることを考えた。授業の趣旨の中に、総合的学習および「生きる力」に関わる学習という、現在教育の場で話題になりつつある二つの課題が自ずと含み込まれた形になった。

『アンダーグラウンド』は、小説家の村上春樹が初めて取り組んだノンフィクションとして、新聞・雑誌等で賛否両論を含めて話題になった。その内容とは、1995年3月20日に起こった「地下鉄サリン事件」に関するものであり、62名に及ぶ事件の被害者に、直接村上春樹がインタビューをした記事をまとめたものとなっている。村上河合隼雄との対談集において、このノンフィクションの出現を予告した。

ぼくは実は今、ノンフィクションの本を書こうと思って、そのリサーチのようなこと

をしているところなんです。ちょっと小説のほうは一服して、この一年はそれに集中してやってみたいという気持ちでいます。テーマを定めて徹底的に調査をして、一人でも多くの人に話を聞いて、まとまったかたちの「非小説」をひとつ書きたいと。いろんな意味でそうすることが自分にとっても必要じゃないかを感じるんですね。そこには人の話をいっぱい聞くことによって自分がある意味で癒されたいという感覚もあるのです。⁴

この村上の「徹底的に調査をして、一人でも多くの人に話を聞いて」という姿勢は、実際に『アンダーグラウンド』の中に読み取ることができる。さらに村上が、人の話を聞くという行為の中に「癒し」の機能を考えていることにも注目したい。『アンダーグラウンド』の教材化の観点として、この「癒し」の問題を考慮することにした。

そこで授業のテーマとして、「傷は癒されるか」という問いを掲げた。この問いは、一つに『アンダーグラウンド』のインタビューイとなった「地下鉄サリン事件」の被害者に対する問いである。事件の衝撃がトラウマとなって、そのPTSDに苛まれ続ける被害者の方々にとって、事件当時の様子がそのまま綴られることは、果たして「癒し」につながるのだろうか。同じ問いは、インタビューア村上春樹に対するものにもなる。それは対談の中の村上の「人の話をいっぱい聞くことによって自分がある意味で癒されたいという感覚」に重なる。さらに、本の読者となる学習者一人ひとりへの問いでもある。『アンダーグラウンド』を読むことによって事件の被害者の方と「傷」を共有し、「生きること」に対する意思を改めて確認することは、学習者に「癒し」をもたらすと考えた。それは続く「聞き書き」という活動においても、明確に立ち現れるものであることを信じて、指導計画を練ることにした。

3 『アンダーグラウンド』の特徴

『アンダーグラウンド』に登場するのは、すべてが地下鉄サリン事件の被害者と被害者に関わる人たちである。加害者の側は、この本の中では前面に出ることはない。筆者はまず、事件の被害者であるインタビューイのプロフィールから紹介するという形式を取った。この点に関しては、「はじめに」と題する前書きの中で、村上自身が明確にしている。

インタビューイの個人的な背景の取材に多くの時間と部分を割いたのは、「被害者」一人ひとりの顔だちの細部を少しでも明確にありありと浮かびあがらせたかったからだ。

⁵

それまでは「地下鉄サリン事件」というと、マスコミの影響もあって、とかく加害者の方にばかり関心が集中し、肝心な被害者の真実は全くと言っていいほど語られることが少なかった。一方で加害者の宗教団体にかかわる用語は、広く喧伝されて流行語にまでなった。そこで村上は、改めて被害者一人ひとりの物語に耳を傾けようとしたわけである。

さらに後書きに相当する「目じるしのない悪夢」と題する文章の中で村上は、被害者の物語という点をさらに強調して、加害者側すなわち「あちら側」のジャンク（がらくた、まがいもの）としての物語に対抗する「こちら側」の物語を紡ぎ出す必要性に言及している。村上は次のように問いかける。

「こちら側」の私たちはいったいどんな有効な物語を持ち出すことができるだろう？

麻原の荒唐無稽な物語を放逐できるだけのまっとうな力を持つ物語を、サブカルチャーの領域であれ、メインカルチャーの領域であれ、私たちは果たして手にしているだろうか？

これは、物語作家である村上春樹の誠意として捉えることができるように思う。この本によって、村上は「こちら側」にいる被害者、すなわち一般市民の側の「物語」を構築した。それは、「あちら側」のジャンクとしての物語への対抗措置にほかならなかった。

『アンダーグラウンド』の教材化に際しては、以上のような作品の特徴を十分にふまえる必要がある。わたくしは何回か繰り返して本文を読み、また新聞や雑誌に可能な限り目を通して、この作品に関わる様々な記事を把握し、必要に応じてコピーを取った。さらに「地下鉄サリン事件」に関連するテレビ番組の録画もした。その中から、『朝日新聞』の記事（1997年3月24日付、1997年6月4日付・夕刊）とNHKのETV特集「ある被害者の記録」のビデオを、補助教材として準備した。

『アンダーグラウンド』の読みに入るに先立って、村上春樹の小説の一節を読んで、その特徴的な文体に慣れるように配慮した。文理両系とも『ノルウェイの森』の蛍が登場するシーン、そして文系は授業時間数に余裕があったため、『ねじ巻き鳥クロニクル』第三部「鳥刺し男編」の「獣医」が自らの運命と向き合うシーンをそれぞれ教材化した。これらの作品を教材として紹介し、その内容と特徴を読解・鑑賞した。村上春樹は自主的な読書生活の中で出会っている学習者も多く、現代作家の話題作を読むということで、彼らの興味・関心は喚起された。

『アンダーグラウンド』の教材化を考えるに際しては、特に特定の宗教団体に対する扱いには十分に配慮をしなければならない。教育法規にも定められているように、ある特定の宗教団体を批判することは国語の授業の目指すべきことではない。そのことに配慮して、教材化に当たって固有名詞は極力排除することにした。

まず『アンダーグラウンド』の本文からは、「はじめに」と「目じるしのない悪夢」の一節、そして三人の被害者の方の記録を教材とした。具体的には「豊田利明」さん、「明石志津子」さん、「和田嘉子」さんの三人の方の記録である。豊田さんの記録を選んだのは、生き方と考え方がきわめて明瞭な形で読み取れたこと、さらにNHKの特集番組に登場することで、言語と映像の比較ができることを期待したからである。明石さんの記録は、内容のインパクトの強さに加えて、『アンダーグラウンド』の中で唯一村上自身の文体を表に出してまとめられたものという理由から。さらに和田さんの記録は、直接的な被害者ではなく、夫を失うという悲劇の中で、日常の光景が鮮やかに描かれたものという理由から、教材として選択した。

教材はすべて「研究資料」として整理し、特に三人の被害者の方の記録は、途中を省略せずに全文を印刷して配布した。

4 『アンダーグラウンド』を用いた授業の実際

授業ではまず1997年3月24日付『朝日新聞』の記事を紹介して、『アンダーグラウンド』という本がどのような内容のものかという点を理解させるところから出発した。1995年3月20日に起きた「地下鉄サリン事件」に関わる内容であること。事件の被害

者に村上が直接インタビューをした内容がまとめられていること。加害者のジャンクとしての物語に対抗できる物語を作るための試みであることなどを、学習者は資料を参照しつつ受け止めた。

続いて「はじめに」の一部を読んで、村上春樹がこの本をまとめた意図について考えることになった。ここでは特に被害者一人ひとりの顔だちを少しでも明確にするという点に、重点が絞られた。

わたくしは毎時間「研究の手引き」と「授業レポート」と称するプリントを作成して全員に配布し、それに基づいて授業を展開している。教材はすべて「研究資料」として、通し番号を付して配布する。「授業レポート」の末尾には「本日のひとことメモ」と称する欄を設けておいて、学習者が授業中に感じたことや考えたこと、担当者への質問や意見などを自由に記入させている。点検の際に、「ひとことメモ」に書かれたメッセージには必ず返答のコメントを記入することになっている。この実践は学習者とのささやかなコミュニケーションの場として、有効に機能しているものである。

『アンダーグラウンド』の授業では、初回から強い反応があった。ある学習者の「ひとことメモ」の欄には、次のようなメッセージが寄せられた。

僕が中学の卒業式を終えて帰って来ると、サリン事件の報道があったんです。この事件は僕にとっても、中学から高校へと進む過程でターニングポイントとなったものでした。

2年前という近い過去の様々な事実が、『アンダーグラウンド』を読むという授業の中で、個々の学習者に蘇ってきた。「卒業式から帰ってルンルン気分でテレビを見てガクゼンとした」とか、「あのとき自分はスキー教室から帰るバスの中にいた」のように、その事件当日の時間を現在に蘇らせる学習者が多かった。

2年前という近い過去の記憶も、次々と塗り替えられる新しい事件によって、次第に風化しつつある。しかしながら、地下鉄サリン事件は、2007年現在になっても、決して全面的な解決を見てはいない。いまなお事件の重さを引きずっている人がある。風化しつつある重大な事件のことを思い出すことは、決して意味のないことではあるまい。

授業では続けて、一人の人の記録に2時間ずつを費やして、じっくりと読んでいった。授業時間内のみでは読む時間が不足するので、課題として次の時間までに読んでおくように随時指示を出した。授業では、豊田さん、明石さん、そして和田さんの記録という順序で読み進めた。読むにしたがって、学習者の反応はそれまでになく充実したものになっていった。これまでに様々な教材を扱ってきたが、このときほどまで確かな反応を感じたことは稀である。

授業は、学習者が特に印象に残った箇所、および重要と判断した箇所について、理由を添えて発表するという形態で進行した。豊田さんの記録からは、豊田さんの誠実な人柄と、同僚を思う気持ち、そして何よりも仕事に対する強い責任感、事件に遭遇したことを「被害者」ではなく「体験者」として捉えようとする意志の強さなどに、学習者は一様に感動する。プロフィールに相当する箇所で村上が紹介した「職業倫理」という要素を、まさに痛感した学習者が多かった。ある学習者は次のような感想を綴っている。

事件を振り返って、サリンの被害者ではなく体験者であると語る豊田さんの考え方は、苦しみの中から生まれたポジティブな考え方である。憎しみは何も生み出さないとい

う結末のことは、実際に被害を受けた人しか感じることができない道徳観であり、事件の影響の大きさを痛切に感じ、衝撃を受けた。

この学習者の「道徳観」ということばに着目したい。豊田さんの記録から、学習者はものの見方、価値観の持ち方という基本的な課題を引き出して、様々な側面から考えることができたように思う。特に爆発物らしき危険物があつたときに、部下に対して行けと命令するのではなく、必ず自分で行くという行動に代表される豊田さんの強い責任感には、多くの学習者が深い感銘を受けている。

続く明石さんの記録では、まず文体に着目した。豊田さんの記録が、豊田さん自身の語りの言説によってまとめられていたのに対して、明石さんの場合は村上春樹自身の文体によってまとめられている。それは明石さんが、サリンの後遺症によって満足に話すことができないことに起因するわけだが、小説家としての文学的な方法が随所に生かされていることに注目した。『アンダーグラウンド』の前に「ノルウェイの森」を読んだという学習の成果が、問われることになった。例えば、明石さんの瞳の中に宿る光の描写、病院に明石さんを見舞うときに村上が黄色い花を持参するときの感覚的な表現、村上が明石さんに手を握る行為を要求する様子などの表現が、きわめて文学的な表現になっていることを学習者は読み取った。それは『ノルウェイの森』の文体と重なるものであつた。例えば、明石さんの手の感触がいつまでも残り続けたという描写と、『ノルウェイの森』で螢が飛び立った後でその光の残像が主人公の内部に残り続ける描写との関連は、多くの学習者が発見した共通点である。文体もさることながら、彼らは重い後遺症の中で必死に生きようとする明石さんの姿を、深い感動をもって受け止めた。ある学習者は、次のように書いている。

悲痛な印象を受けた。健全な我々（サリンの被害にあわなかった我々）は「かわいそう」「気の毒だ」などの同情をしがちだが、必死で生きようとしている明石さんをはじめとする被害者の人々に「かわいそう」の感情だけでは失礼な気がした。この方たちは、むしろ健全な我々よりも「生」「死」というものに対して真剣に取り組んでいて、我々以上に「生きている」ように感じた。

この感想に代表されるように、多くの学習者が明石さんの「生きる」ことに対する前向きな姿勢を指摘している。それは、瞳の光と村上の手を握るときの力強さに端的に表れている。彼らが印象に残る場面として指摘したのは、この手を握るという場面であつた。

授業では最後に和田さんの記録を読んだわけだが、後で尋ねてみると、今回の授業で学習した三人の被害者の記録の中で、和田さんのものが最も印象的だつたという学習者が多かった。それは、ご主人との出会いから恋愛、結婚を経て妊娠するまで、和田さんの日常の様子がドキュメントタッチで語られていることから、自然に和田さんの語る日常生活の中に入ることができることにもよる。後半では一転して事件当日の悲劇的なご主人の死が語られるが、この「非日常」の出来事によって、「日常」が照らされるという構造は、学習者の共感を呼んだ。また加害者やマスコミを憎む和田さんのことば、お子さんの成長に生きる意欲をつなごうとする和田さんの姿を、共感をもって見つめることができたからである。学習者の感想の一部を紹介する。

一見事件とは無関係に思えるような和田さん夫妻の出会いや結婚生活の話が続く。サリン事件前に加害者と関係を持っていた人などいないのだ。無関係な人々が多数巻き込まれた事件の不条理さを強く感じた。

和田さんの記録の前半では、村上の問いの言説が繰り返し引用される。またインタビューの現場を連想させる「笑」という文字も目立つ。それが後半になると、ほとんど表れなくなる。この表現上の特色は、内容と無縁ではない。学習者はまず初めに、そのことから指摘した。

和田さんの記録を読んだ後で、「目じるしのない悪夢」の一節、および1997年6月24日付『朝日新聞』夕刊の記事によって、授業の総括をした。『アンダーグラウンド』の「後書き」に相当する「目じるしのない悪夢」には、1～8の「小見出し」が付けられているが、授業では次のような小見出しの箇所から一部を引用して紹介する。

- 2 私はなぜオウム真理教から目をそむけたのだろう
- 3 譲り渡された自我、与えられた物語
- 6 圧倒的な暴力が私たちの前に暴き出したもの
- 7 アンダーグラウンド（地下の世界）
- 8 最後に

特に「8 最後に」は、村上春樹の次のような「祈り」で結ばれている。

私のつたない非力な祈りが、少しでも受け入れられる隙間がこの世界のどこかに一い
わば見落とされたようなかっこうで—あるなら、私は強く祈りたいと思う。「私があな
たによって与えられたものを、あなたのもとにそのまま送り届けることができれば」
と。

この「祈り」こそが、「癒し」のモチーフにつながってくる。村上の「祈り」によって、被害者の方々の「傷」はたとえわずかでも癒されたと信じたい。この場合、特に表現による癒しの作用が働く。過去の辛い体験は、それをそのまま表現することによって対象化され、支配することが可能になる。また、被害者における癒しによってこの本をまとめた村上自身、さらにこの本を読んだわたくしたち自身にも「癒し」はもたらされる。

5 授業の総括と今後の課題

『アンダーグラウンド』の授業では、表現や文体の問題にも注意して扱った。個々の被害者の方の記録では、話し手のことばを生かすような文体をあえて工夫していること。さらに話の構成の仕方、聞き手のことばを随所に挿入して、リアリティを醸し出す配慮など、細かい点にも注意して読み進めた。また、豊田さんの記録を読んだ後で、NHKのETV特集のビデオを鑑賞して、映像の中で紹介された豊田さんの様子との比較を試みた。ある学習者は次のように、言語と映像両者の特色に気づいたうえで感想をまとめている。

映像というメディアで視聴することで、相手の話し方や身体的表現から直接感じ取ることができるが、文字による表現の方が内面の描写をも可能にする。また読み手が一つのイメージに限定されずに、さまざまな状況や真理面の想像ができるという点で、映像よりも優れていると見ることができる。

このような表現の問題と連動させながら、内容面のまとめを試みたわけだが、『アンダーグラウンド』の中には、「生きる」という大きなモチーフが含まれていることに学習者は気がついた。それが前に引用した府川の言う「問いかける力」となって、作品を読む者に強く訴えかけてくる。今回の授業を通して、2007年現在なお裁判が続いている「地下鉄

サリン事件」への関心が喚起され、学習者が新聞や雑誌の記事に目を止めるようになったことも事実である。さらにマスコミの報道の在り方や、ノンフィクションというジャンルに対する関心も強くなった。『アンダーグラウンド』の総括としては、やはり実際に「聞き書き」をするという活動がふさわしいと思った。前期末に『アンダーグラウンド』の授業を終えたので、夏休み期間を利用して、学習者に「聞き書き」を実施するように課題を提出した。課題としては、「生きること」に関わるメッセージを引き出すことを目標に、「変容の時代の証言集」を作ろうという目的からインタビュイーを選択させた。

一方、夏休み期間を利用して保護者を対象とした「講座・講演会」が実施されたので、わたくしはここでも『アンダーグラウンド』を扱って、保護者の視点から作品の提起するメッセージを考える機会を設けた。このようにして、学習者と保護者とが共通の教材を読んで、家庭の中で話し合いの場が持たれることを期待した。聞き書きの活動におけるインタビュイーとインタビュアーとの心の交流を深めるために、わずかでも資する要素があることを期待した企画となった。

夏休みが終わって学習者は「聞き書き」の課題を持参したが、最も多かったのは父母から父母の生きてきた時代の状況を聞くもので、それに次いで祖父母から空襲や疎開の戦争体験を聞くものであった。中には、クラブのコーチや先輩からクラブ活動に関わる話を聞いたり、学校や学習塾の教師から身近な教育の話聞いた学習者もいる。聞き書きの意義として、「聞く」活動と「書く」活動とを関連させた総合的な体験学習を実現するという点が挙げられるが、インタビュイーとインタビュアーとの間に精神的なコミュニケーションが成立することは大きな意義である。父母から話を聞いた学習者は、父母の生き方や考え方を知ったことに満足感を表明した。特に熱心に取り組んだ学習者は、『アンダーグラウンド』が親子関係の枯渇を解消するための起爆剤になったと語った。

聞き書きの提出をもって、『アンダーグラウンド』を教材とした授業は終了する。聞き書き集の発行も企画はしてみたものの、今回は時間的余裕と予算の関係から実現しなかった。授業中にクラス内部の友人と交換して、相互評価をするにとどめることになった。ある学習者の授業全体に対する感想を、次に引用しておきたい。

授業に取り組む前は、事件の体験談を悲惨なものとしてとらえることしかできなかったが、実際に読んでみると「悲惨」というラインを超えた、もっと大切なメッセージを感じ取ることができた。今回取り上げた三人の方に共通して僕が持った印象は、誰もが「死」に対する意識、そして「生」に対する意欲を、事件をきっかけに持った方だということだ。またそれと同時にこの方々の持つ前向きな、アクティブかつポジティブな生き方というものに心打たれた。

ここでこの学習者が指摘した「『悲惨』というラインを超えた、もっと大切なメッセージ」とは、「生きる」ことに対する前向きな意思にほかならない。その意思の発見こそが、「傷は癒されたか」という問いに対する一つの回答となる。

ところで筆者の村上春樹自身が、『アンダーグラウンド』に対する読者の反応に強い関心を持っていることが、『文藝春秋』（1997. 8）の「二千人の『アンダーグラウンド』」から察することができる。これは単行本に挿入された葉書によるアンケートや、村上個人のホームページに電子メールで寄せられた二千人に及ぶ読者たちの声を紹介し、筆者がコメントを添えた内容であるが、『アンダーグラウンド』を教材化した立場にとっては、参考

になる内容であった。筆者によれば、寄せられた意見として圧倒的に多かったのは、次の二点である。

- ① 実際にこんなことが起こっていたとはまったく知らなかった。被害者のおかれた実情を知って驚いた。
- ② 地下鉄サリン事件のことをほとんど忘れて、興味を失っていたが、あらためて自分のこととして考え直そうと思った。

事実今回の授業を通して、学習者が『アンダーグラウンド』を読んだ感想にも、この二点に言及したものは多かった。さらにインターネットを利用して、村上春樹のホームページにアクセスを試みたところ、実に多くの読者の声が寄せられており、その一つ一つに村上が丁寧にコメントをしていることが明らかになった。このことから『アンダーグラウンド』の授業は、インターネットのようなメディアを通して、学習者がより多くの読者とのコミュニケーションを開く可能性が秘められていることが分かる。今回わたくしが担当した高校3年生による作品の理解を、一つの学校の内部にとどめずに、筆者をも含めたより広い場面へと送り届けて「読みの交流」を実現することができれば、学習者の表現意欲は大いに喚起され、新たな「癒し」の可能性が開かれるだろう。

冒頭で話題にした子どもたちのストレスに関してその原因を探ってゆくと、多くの現代社会の病理に行き着くわけだが、『アンダーグラウンド』ではその中の深刻な側面が明らかにされる。そこから受けた人々の「傷」の「癒し」を考えることが、今回の授業の目指すところである。授業を通して「癒し」の方向性が見えたことは、大きな収穫だった。授業全体を通して実感できた成果は、何よりも『アンダーグラウンド』という教材の力に負うところが大きかったように思う。今回村上春樹が『アンダーグラウンド』という地下鉄サリン事件を題材にした大きな仕事をまとめたことから、その教材化を試みて「現代文」の授業を構築することができた。適切な教材の発掘は、「癒し」としての国語教育を実現する上で不可欠な要素である。教科書教材のみに依拠することなく、視野を広くかつアンテナを高くして、常に直接「現代」を問う要素を含むインパクトある自主教材を発掘する努力を続けたい。

「傷は癒されるか」という研究テーマは、国語教育の一つの課題としてこれからの研究でも継続して扱いたい内容である。効果的な教材によって学習者が生きる「いま、ここ」を直接照らしつつ、ストレスが多い現代社会を生きるための意思と方向性を獲得することができたとき、「癒し」としての国語教育は一つの結実を見る。

注

- 1 宮台真司「五月病のないキャンパス」(『毎日新聞』1997年5月25日付)。
- 2 早稲田大学系属早稲田実業学校高等部。
- 3 府川源一郎「『文学』に『生きる力』が育てられるのか」(『月刊国語教育』1997.7)。
- 4 村上春樹・川合隼雄『村上春樹、河合隼雄に会いに行く』(岩波書店、1996.12)。
- 5 本節における村上春樹の引用は、特に断り書きがない場合すべて『アンダーグラウンド』(講談社、1997.3)による。